様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０１２２

研究課題名（和文）無定形なセルフポートレート：クロード・カーンを中心に

研究課題名（英文）Formless Self-portrait: In Works of Claude Cahun

研究代表者
長野　順子（NAGANO, Junko）

神戸大学・人文学研究科・教授

研究者番号：２０１７２５４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,100,000円、（間接経費）　930,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究期間を通してクロード・カーン（とムーア）の初期のジャーナリズム活動、パリ時代の前衛劇への関心及びシュルレアリストとの交流の中での文筆活動とセルフポートレート及びフォトモンタージュの制作、そしてジャージー島移住後の反ドイツ軍活動について、関連のアーカイヴやBNFでの一次資料他による調査・研究を行い、このユダヤ系フランス女性の「セルフポートレート」を中心とした多領域に亙る独自な活動の全体像を統括的に把握することができた。また、20世紀以降の女性アーティストのセルフポートレートにおける「自己同一性の転覆」の諸相を分類し、これらの現代的傾向の先駆者としてカーンを位置づけることができた。

研究成果の概要（英文）：Since re-discovered in the 1980s, Claude Cahun (with her partner Marcel Moore) has been recognized as one of the surrealist photographers, with her striking self-portraits and photomontages which are characterized by travesty or cross-dressing and her distorted or mirror images as well. Through this research-program, we tried to put together Cahun's various kinds of activity, from her earlier writings in Nantes through her artistic and political cooperation with Surrealism in Paris to the Resistance against German occupation forces in Jersey Island, and got convinced that she should be considered as a pioneer of contemporary radical female artists, with the Subversion of Self-identity in all her works (in text as well as image).

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学　美学・美術史

キーワード：セルフポートレート　ジェンダー　フォトモンタージュ　鏡　シュルレアリスム

１．研究開始当初の背景

近代以降の美学理論や芸術実践において長い間イメージの対象という周縁的存在でしかなかった女性たちは、「芸術」の領域に積極的に参入しようとしてさまざまな摩擦やトラブルと直面してきたが、1980 年代以降、現代アートの諸潮流に呼応するように、フェミニズムの立場からの美学の伝統の見直しが起こっている。

申請者はこれまで、18-19 世紀における「崇高」や「ピクチャレスク」をめぐる女性作家の美的言説が規範的な語法に対する逸脱や軋みを見せつつ逆に新たな表現の可能性を開拓していった経緯をはじめとして、まなざしと鏡像をめぐる〈メドゥーサ〉メタファーの女性自身による捉え直し、美に代わる現代的な美的カテゴリーとしての「おぞましさ」の系譜についての研究を行ってきた。またコースマイアー著『美学 ジェンダー的視点から』の翻訳（2009）を通して芸術理論と実践に内在する「ジェンダー化された」思考への批判的洞察を紹介した。その過程で、女性アーティストの活動における「セルフポートレート」への集中とその大きな位置づけに着目するに至った。

とくに 20 世紀後半のシンディ・シャーマンらによる写真シリーズがよく知られているが、そのパイオニア的存在として最近とり上げられるようになったシュルレアリストのクロード・カーンは、文学や写真を含む多領域において一貫してセルフポートレートの制作を試みている。そこではスキンヘッドや異性装だけでなく仮面や鏡を用いた彼女自身の像が演出され、多重露光や歪曲効果も駆使したその変幻自在のポートレートの意匠には目を見張るものがある。20 世紀末にようやくその特異な活動が顧みられることになったカーンの仕事は、その後の女性アーティストの動向を先取りするものとしてきわめて興味深いが、まだその全体像は明らかになっていない。彼女の領域横断的な仕事を総合的に捉える作業が必要であり、その上で、それを引き継いで主体の同一性転覆を追究する女性たちのラディカルな試みが、現代アートの変革のひとつの起爆剤となっていることを明確にする必要があると考えられた。

２．研究の目的

（1）20 世紀以降の女性アーティストに共通する顕著な傾向として、ジャンルを越えたセルフポートレートの制作が挙げられる。伝統的に芸術の対象として理想化された「女性像」や諸メディアによるステレオタイプ化に対抗して、彼女たちは自己自身の虚像と現実を捉え直し、ときにおぞましくモンスター的な変容を自ら表象しようとしている。本研究はその初期の代表者として、1980 年代に「再発見」されたシュルレアリスト、クロード・カーン（Claude Cahun 本名 Lucy Schwob, 1894-1954）を取り上げ、その多岐に亙る活動を統合的視点から考察する。

そもそも彼女の筆名は男性を思わせる「クロード」とユダヤ性を顕示する「カーン」という苗字を組み合わせたもので（そのため初期のシュルレアリスム研究者は彼女を男性作家と思い込んでいた）、カーンによるこうした自覚的なアイデンティティの撹乱を、その多領域に亙る「セルフポートレート」の具体的諸相において浮き彫りにしていく。とくに 20 世紀初頭という時代状況との屈折した関わり、そのポリティカルな手法の独自性について明らかにすることが本研究の第一の目的である。

（2）さらにカーンに続く女性アーティストによる、固定的な主体イメージを宙吊りにし流動化させていく一連の「セルフポートレート」の試みが、現代において「芸術」をめぐる既存の概念装置を内側からどのように変革しえた／しうるのか、その可能性について展望することを本研究は目ざしている。そして、こうした「イメージ化の領域の流動性」をめぐる動きを女性によって制作されたアートのみに特定化するのではなく、それを通して、アイデンティティをめぐるこのラディカルな自己表象の試みが「美的なもの」の新たな転回にもちえた意義と可能性を見定めることが、本研究の最終目的となる。

３．研究の方法

クロード・カーンについての本格的な研究は、F. Leperlier による最初の伝記的研究や G. Doy のモノグラフ的研究の他、いくつかの論稿があるにとどまる。これまで数回の作家展やジェンダーをテーマとして展覧会等で部分的に扱われ、日本語でも文学的アプローチによる研究が出はじめているとはいえ、カーンのもつ作家・詩人・評論家・俳優・写真家・オブジェ制作者としての多様な面を統一的に捉える試みはまだ十分になされてはいない。その生涯を通じた変化に富む活動には、現代のポストモダン的傾向を先取りするかのごとき以下のような要素が指摘できる。

（1）制度化された既定の作品形態を脱すること、及び多ジャンル間の横断

（2）女性についての既成イメージを誇張的に流用したり転覆させたりすることにより批判的距離をつくりだし、そのイメージを脱構築すること。

（3）アーティスト自身の身体を用いて固定化された女性像を崩し、断片化等により新たな身体表象と身体感覚の追究を試みること。

これらの要素について彼女の各時期の作品に即して精査し、そこに通底するラディカルな思考法を明らかにする。まずカーン

の仕事を、その文筆による先進的な実験、セルフポートレート写真でのパフォーマンス性、フォトモンタージュにおける身体の断片化と結合の手法、それらに見られる人格の同一性や作品の唯一性（Identity, Originality）という観念への疑問視について、彼女の著作、詩作品、雑誌や新聞への寄稿文、手稿、写真作品、モンタージュやオブジェ作品を詳細に分析しながら、考察する。

その際必要となるのは、生涯のパートナーとなるマルセル・ムーア（Marcel Moor 本名 Suzanne Malherbe, 1892-1972）との関係と後者のイラストレーター活動、カーンのユダヤ人としての自覚とドイツ占領時代の抵抗運動についての調査、またカーンと他の作家（とくにシュルレアリストたち）との関係の検証、及び彼らの仕事との比較や対比という作業である。さらに、現代の女性アーティストの先駆者としての彼女の位置づけについて、20 世紀の現代アートの動向を俯瞰しつつ詳しく調査・研究する。

４．研究成果

（1）カーンの領域横断的な仕事の総合的把握

①ナント時代及び影響関係

生地フランス・ナント市の中心街で父親 Maurice Schwob が経営した『ロワールの灯台』（*Le Phare de la Loire*）新聞社屋跡等を確認し、ナント時代におけるカーンの両親や祖母との関係、及び叔父で作家の Marcel Schwob を中心とした象徴主義文学や世紀末芸術からの影響（シュオッブの文学的語りにおける「自己の複数性」、ジッドの「ナルシシズム」論、イギリス人作家ワイルドの『サロメ』問題、アポリネールの「カリグラム」等）について調査した。

カーンのユダヤ系フランス人という出自と強い父親、精神を病んだ母親、養育者の祖母との屈折した関係からだけでなく、早くから象徴主義文学に親しく触れていたことからも、自己の主観性や内面への探究と同時にその不可能性の予感、主体の同一性や自律的自我への疑問視が生まれ、それが彼女の仕事の通奏低音となっていたことが確認できた。

②ジャージー島での晩年の活動

カーンがパリ時代にほぼ毎夏を過ごし晩年に移住したイギリス領ジャージー島の Jersey Heritage Trust (JHT)において Cahn and Moore Collection に関する資料調査を行った。JHT の保存資料の中でカーンの反ドイツ活動のビラやゲシュタポ拘留中の書類（死刑宣告書及び知人による助命嘆願書等）や友人達との往復書簡等を閲覧することにより、英国領で唯一ドイツに占領された同島の抵抗運動の中でのカーンの活動状況を確認した。

また同島 St. Brelaide 海岸沿いのカーンの住居 La Rocquaise と隣接した教会墓地のユダヤ人区域内の Lucy Schwob の墓を確認した。首都 St. Helier のミュージアム内のカーン関連の常設展示等からこのフランス人移住者〔英語ではカフーンと発音〕が同島内でも注目され始めていることが分かった。

③カーンの文筆活動

カーンとムーアがナントで始めていた新聞や雑誌の文化欄への寄稿やイラスレーターとしての活動について調査するとともに、彼女たちが早い時期からテクストとイメージにおける実験的試みを行うとともに同時代の先端的な芸術運動に絶えず目を向けていたことを確認した。

また 1920 年以降のパリ時代のカーンの著作の読解と分析を進めて、その独特な文体と、文学的伝統を背景にもちつつそれを脱構築する彼女の独自の手法について考察した。短編集『ヒロインたち』（*Héroïnes*）はギリシア神話の美女ヘレネやお伽話のシンデレラなどのよく知られたヒロインの物語を転倒させるフェミニズム的要素をもち、とくに本人のモノローグや対話によってその本音を語らせるという一種演劇的な形式をとっていること、また 1930 年の『無効の告白』（*Aveux non avenus*）は自伝の形をとりながら幻想と現実の間を往還する各章の冒頭をムーアとの共作になるフォトモンタージュで飾り、そのテクストにも演劇的な手法が見られることが明らかになってきた。

さらに同時期に J.リヴィエールによる心理学の論文「仮装 Masquerade としての女性性」が出たことと、カーンが心理学者 H.エリスの女性論を英語からフランス語に翻訳出版していることから、彼女自身の心理学への関心についても考察した。

④セルフポートレートとフォトモンタージュ（パリ時代前半）

パリ時代の前半に、英米の作家とフランスの知識人の交流の場であった書店への出入りや二つの前衛劇団へのアクティヴな参加とともに、カーンのセルフポートレートの主要なものが制作されており、それらを時間軸に沿って分類・分析した。とくにセルフポートレート写真での異性装やパフォーマンス性に加えて、鏡や二重露光等による自己像の「多重化」や「歪曲化」、仮面や人形を用いた身体感覚の「異化」という手法の変遷を浮き彫りにした。

またそれらを主な素材としたフォトモンタージュ作品の特異なスタイルを分析して、そこでの身体の「断片化」と結合の手法、そこに見られる自我の「同一性」や作品の「唯一性」という観念への挑戦について考察した。さらに、これらの分析及びこの時期のカーンとムーア前衛劇への実践的な関与状況から、カーンのセルフポートレートにおける「演劇性」という問題が浮上して

きた。
⑤シュルレアリスムとの関係（パリ時代後半）
カーンの早くからの交友関係（詩人 H.ミョー、R.デスノス）、及び政治活動から接近したシュルレアリスト（A.ブルトン、G.バタイユら）との関わり、また「人形」というテーマに関する（H.ベルメールとの）呼応関係等について調査・研究した。とくに写真制作に関してはモンタージュ技法や多重露光、歪曲効果などの技法についてマン・レイや A.ケルテスによる画面構成との比較、また異性装に関してはデュシャンやモリニエによる逆方向のそれとの比較を行った。
加えてカーン及びシュルレアリスム全体における人形・仮面（や機械）の使用の淵源と見なすべき 18・19 世紀フランスの自動人形（automaton）や動く彫像（ピュグマリオン神話）への思想的・芸術的関心の系譜を考察した。それにより近代社会の機械化・工業化における人間自身の自動人形化や人間身体とメディアの関係等への新たな視野が獲得できた。
1930 年代以降のカーンの活動においてシュルレアリスムとの影響関係はたしかに無視できないが、それ以前のカーンの象徴主義や前衛演劇運動への傾倒によって彼女の文筆活動やセルフポートレートの独自な形式が形成されたことから、とくに 1920 年代という第一次大戦後パリの沸騰し錯綜した文化的動向との連関のなかでカーンの仕事を見ていく必要性を確認した。

(2)自画像とセルフポートの系譜とカーン
①自画像の系譜と女性画家の特徴
16～18 世紀以降の画家の自画像の系譜（列席型・変装型・研究型・独立型）を跡づけ、その分類、及び近現代にかけての画家としての自負や自己確認、自意識の高まりや精神分析以降の自己探究の場への変遷を考察した。
また女性画家（L.フォンターナ、A.ジェンティレスキ、A.カウフマン他）の作品の多くは父や師に帰せられてきたが、その自画像には絵を描く姿や音楽を奏する姿から自身の能力への自負が表わされていることに加えて、男性と女性の自画像におけるジェンダー的差異（身体的構え、表情、まなざし等）について分析した。
20 世紀以降に急増した女性アーティストのセルフポートレートへのこだわりは、古来の女性の身体表象に対する何らかの意識化や抵抗感にもとづく自己表象の試みとして解釈でき、また過去の女性作家の自画像との比較によって、現代の女性アーティストのセルフポートレートの独自性及びその逸脱の様相がより明確になってきた。
②現代の女性アーティストによるセルフポートレート
20 世紀以降の女性アーティストの活動を大きく三つの時期に分けて、ステレオタイプ的な女性像や芸術家像から逸脱した「自我」像、多層的・分裂的な身体イメージを追究する現代の〈自我像〉について検討した。
a) 1930 年代～40 年代：まずカーンと同時代のダダイスムやシュルレアリスムにおける女性アーティストたちの仕事を調査するとともに、ドイツ・バウハウスの G.アルントやイタリアの W.ウルツらによる一連のセルフポートレート写真での「ロール・プレイ」や「仮装」の手法を検討した。
b) 60 年代～70 年代：次にフェミニズム運動と並行する形で展開されたインスタレーション（L.ブルジョワ他）、パフォーマンス（M.アブラモヴィッチ、L.アンダーソン他）、写真（B.ユルゲンセン、F.ウッドマン、K.スミス他）の各領域に特徴的な自己の身体のデフォルメ、隠蔽、断片化の手法を分析した。
c) 90 年代～21 世紀：最後に新たに登場したビデオアート（P.リスト、T.エイミン他）を中心に各ジャンルにおけるセルフポートレートのさらなる新しい境域について考察した。その際、非西欧文化圏（M.ハトゥーム、Sh.ネシャット）、アジア・日本（イ・ブル、澤田知子他）の女性アーティストの活動も射程に入れ、これらを通じて各ジャンルの特徴を見極めながら、アイデンティティの流動化への志向性という大きな共通傾向を視野に入れて「セルフポートレート」の系譜を精査した。
2011 年 Jeu de Paume 美術館で開催されたクロード・カーン展はカーンへのアクティヴな関心を示すものであった。また同美術館での女性写真家 B.アボット展も 20 世紀前半の女性アーティストの発掘に繋がるものである。21 世紀初頭より目立ってきた女性アーティストの系譜（共通性と個人的差異）への関心や大規模な回顧展等によって、彼女たちに特有のセルフポートレートに関する本研究の意義が再確認できた。

本研究期間を通してカーン（とムーア）のナント時代のジャーナリズム活動、パリ時代の前衛劇への関心及びシュルレアリストとの交流の中での文筆・写真制作活動、そしてジャージー島移住後の反ドイツ軍活動について、関連のアーカイヴや BNF での一次資料閲覧等により調査･研究を行い、このユダヤ系フランス女性の「セルフポートレート」を中心とした多領域に亙る独自な活動の全体像を統括的に把握することができた。また、20 世紀以降の女性アーティストによるセルフポートレートの「逸脱的な自己表象の試み」の諸相を分類し、こうした現代的傾向の先駆者としてカーンを位置づけることができた。
また、ナント大学の視覚文化論教員 P.ア

ラン氏とカーン研究に関する意見交換を行い、シュルレアリスムと関わる以前の彼女の関心と（日本人演劇関係者らとの接点も含めた）実践活動をさらに精査することによって、ジェンダー的・ポストモダン的な「主体の同一性の転覆」という観点だけでなく、より広い視角から彼女の領域横断的な仕事の独自性と先駆性とを再検討していく作業が必要となることを相互に確認した。

それに加えてカーンらの 1920 年代の前衛劇への関与について、フランス国立図書館（BNF）においてとくにエソテリック劇場に関連した資料の microfiche 閲覧による調査を開始し、今後の研究の指針を得た。さらにカーンの時代的・社会的コンテクストとの関係及びその現代的意義に関する研究を進める予定である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

① 長野順子「セルフポートレートと演劇性―クロード･カーンと前衛劇の交差」『美学芸術学論集』第 10 号、査読有、神戸大学芸術学研究室、2014、pp. 6-23。

② 長野順子「共通感覚――感性と社会をつなぐもの――」『カントを学ぶ人のために』第 II 部第 4 章、世界思想社、査読無、2012、pp.281-297。

③ 長野順子「無定形のセルフポートレート―クロード・カーアンの写真実践」平成 20-22 年度科学研究費（基盤研究 B)「ポストモダンにおける芸術と写真」（代表者:山口和子）研究成果報告書、査読無、2011、pp.19-30。

〔学会発表〕（計３件）

① 長野順子「セルフポートレートにおける演劇性－クロード・カーンと前衛劇との交差から」日仏美術学会第 129 回例会、2013 年 12 月 21 日、京都大学文学部。

② 長野順子「クロード・カーンのセルフポートレート」ジェンダー研究会、2012 年 12 月 1 日、神戸大学文学部。

６．研究組織

(1)研究代表者

長野　順子（NAGANO，Junko）
神戸大学・大学院人文学研究科・教授
研究者番号：２０１７２５４６